# 蒼き鞘

風色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼き鞘

【Ｎコード】
Ｎ７１４２Ｃ

【作者名】
風色

【あらすじ】
レイフィア王国の第三王女、翠。幸福で退屈な毎日を送っていたが、ある他国の事件が王国の運命も、翠の日常をも変えていく。蒼き鞘を受け継ぐとき、翠と王国は何を見、何を知るのか。朝日を受け、始まりの鐘は鳴り始める。

# プロローグ

窓を開けると、そこには世界が一面に広がる。
なんて格好つけた形容をつけたがるほど、ここの窓辺からの景色はお気に入りのものだ。
緑に萌える木々が見え、草原を渡る風が吹きぬけ、人々の顔は和やかで幸せそうに微笑んでいる。
この王国の窓辺から見える景色はいつも同じ。とても穏やかで、とても緩慢だ。
それはこのうえもない幸せだと、誰に言われるでもなくちゃんと自分で理解してはいる。
父が治めるこのレイフィア王国。
小国ながらも、数百年もの歴史を有する王国だ。
資源も豊かで、国の規模に見合ったこぢんまりとした暮らしを昔から続けている。
争いごとには無縁なのは、ひとえに周囲の地形のせいだろう。
このレイフィア王国は、三つの山に三方を囲まれている。
西のガルト山、北のマロウ山、東のネイロウ山。
それぞれの山々は緑も豊かで動物もたくさん住んでいるが、いかんせん人の手がいっさい加えられていないため、容易に山を渡ることができない。
なので交易などをする時は、普通は海から来る交易船で物資を仕入れることがほとんどだ。
たまに山を越えて行商人が来ることもあるが、それはとても稀だ。
本当に小さい規模の国なので、たいていは自給自足で済んでしまうのだ。
だからなのか、人々の繋がりは強く、城下町にはいつも明るい人々の笑い声が溢れている。

今、窓辺から王国の景色を見渡している翠も、この国のすべてを愛している。
後継順で言うと、第三位の自分は滅多なことでも起こらぬ限り、王位を受け継ぐことはないだろう。
けれど、とくに野心もなにも持たない自分には、そんなことはなんの関係もなかった。
そもそもこの国の王位を継ぐ、ということで野心を抱けと言う方が無理だろう。
自分もこの国は好きだ。護っていきたいとも心の中で誰よりも強く思っている。
しかし、わざわざ自分が王位を継がずとも、この国は護られていくだろう。
一癖も二癖もある、兄と姉の二人で。

退屈で幸福な景色にあくびを一つ漏らすと、翠はくるりと踵を返してドアに手を掛けた。
窓際に置かれた机には、小難しい文字が羅列している本や辞書が文字通り山のように置かれている。
都合の悪いその光景に目を瞑って背を向けると、勢いよくノブを回す。
ドアはそんな翠の心を察しでもしたのか、向こう側からがちゃりと開いた。
バランスを崩して、頭から転げ落ちる。
とんでもない衝撃からなんとか意識を取り戻すと、ドアに目をやる。
その寸前、何か大きな影が目の前に立ち塞がった。
それがなにかを理解すると、翠の顔からさぁーっと血の気が引いていくのが分かった。
逃げようとかがんだままの体勢で通路の端まで後ずさりすると、ぐいっと首根っこを掴まれて引き戻される。

すぐ近くの耳元で、聞き覚えのある青年の声がした。

「翠。お前また逃げようとしたな」

「グ、グレイ……。げ、元気？」

親猫に捕まえられた子猫のごとく、自分の体がぶらんぶらんと宙に浮いている。

逃げないように翠を掴んでいるのは、黒い甲冑を着た騎士だ。

鋭い目つきに、鎧の色に引けを取らぬほど艶のある漆黒の黒髪を短く切りそろえている。

きっとこの容姿に騙される女は星の数ほどいるだろうとため息をつき、翠は恨みがましい目をグレイという青年騎士に向けた。

「なんの因果か知らんが、俺はお前のお目付け役に任命されてるんだ。さ、とっとと部屋に戻れ」

「うるさーい！　この変態！　ロリコン！　ナルシスト！　ハゲ！」

「低脳な罵声はお前の品位を落とすだけだぞ。さあ、お前の評判が落ちる前に勉強しろ」

「いやだー！　私は自由に生きるんだー！」

じたばたと暴れようとも、幾百人もの中から王室付きの騎士に選ばれただけあって、グレイはびくともしない。

無表情で翠をそのまま部屋へと引きずり戻し、不満そうな翠に意地悪い笑みを向ける。

「ま、勉強しても胸はつかないしな」

「うっさい！　煉お姉ちゃんと比べるな！　あの胸は人外だっつーの！」

にやにやと翠を見つめるグレイを睨みつけ、腕を組んで目を閉じる。

煉。翠の八つほど年上の姉だ。

その美貌とプロポーションは、この小国であるレイフィアに似合わぬほど他国にまで知れ渡っている。

それほど美しい姉は、美しいだけはなく、魔術の腕にも長けているというのだから驚きだ。

賢者よりも威力の高い魔術を使い、どんな叡智を持った愚者をも軽く凌駕する底知れぬ魔力を有している。
そんな姉なのだが、やはり欠点というものは、ひとつぐらいは必ずある。
煉の唯一にして最大の欠点は、性格の悪さだ。
翠は常々こんなに意地悪い姉を持った自分の不幸を呪っていた。
突然部屋にスライムらしきうねうね動く物体を半端でない量で発生させたり、天井からカサカサと這い回るものを大量に部屋に降らせたり。
たまに洒落にならないものと対面したこともあるが、なんとか持ち前の根性で危機一髪の状況を切り抜けてきた。
文句を言いに行こうにも、姉の凄さはそんなことなど知った事かという図太い神経の成せる業か、まったく悪びれないところにある。
翠が文句を言いに姉の部屋を訪れると、決まって妖艶な笑顔を向けてただひとこと、こう言うのだ。
「ごめんね翠。でも楽しかったわ」
その笑顔に翠が絶句したのは言うまでもない。その日から翠は諦観という言葉を覚えた。
とにかく、姉に意見できるのは父と母以外にいない。兄妹と居る時の姉は、ある意味手綱から解き放たれた暴れ馬だ。
迷惑だなぁ、と思うものの、そんな姉のことをある意味では好いているのも事実だ。
あの悪戯さえなければ、きっとごく普通の仲のいい姉妹になれただろう。
「……って、なんか深い感慨にふけってしまった。ところでグレイは何しに来たの？」
「何しにって、お前がきちんと椅子に座れているか監視しに」
「座れるわ！」
第二ラウンドのゴングが鳴ろうかという、まさにその時。
タイミングよく、控えめなノックが二度聞こえた。

「はい」
翠が促すと、音もなくドアを開けて入って来た人物に目をやり、目を丸くする。
「ガウイ老子」
グレイも同じように驚きに目を見開くと、すぐさま片膝をつき、地面に手を付く。
開け放たれた窓から、そよと一迅の風が吹き抜けて、ガウイ老子の豊かな顎鬚を揺らした。

## プロローグ（後書き）

連載小説ということで、思うままにじっくりと登場人物たちの心情を丁寧に描いていきたいです。

# 第一話　声

数ヶ月前のこと――――。

翠は足音を忍ばせる気配など微塵も感じさせずに、堂々と鬱蒼と木々の生い茂る森の中を歩いていた。
仮にも一国の姫なのだから、すこしは自重しても良さそうなものなのにと、その後ろを歩くグレイは頭を悩ませていた。
そんな自分付きの騎士の苦労などまったく気付きもせずに、翠は楽しそうに森の中を歩いている。
最近は勉強勉強で外に出る機会など無かったため、実にこれが数十日ぶりの外出となる。
勉強よりも外に出て新鮮な空気を吸ってのんびりするのが何より好きな翠にとって、これは随分な痛手だったようで、何日かの間に頬がこけたような気もする。そんなに外が好きだったのかと、ある意味感心してグレイはしみじみと頷いた。
「グレイ！　ねえねえ見て見て！」
ぱたぱたと翠が駆け寄って来る。少し腰をかがめて翠に向き直ると、その掌に握られたものに目をやった。
「なんだ？　仲間でも見つけたか？」
「……本当に失礼だよねグレイって。まあいいけど。それよりこれだよ！」
ぱ、と掌を広げると、そこには額の真ん中に大きな目が開いたモンスターの子供がいた。
ぎぃぎぃ、と低い声をあげてばたばたともがいている。
「……お前、これどこで見つけた？」
「え？　あそこの木の根元。かわいいよねーこれ。親いないのかな

ー」
にこにこと近くの木の根元を指差す翠に軽い眩暈を覚えると、グレイはまだ低くぎぃぎぃと鳴き続けているモンスターをつかみ、ずかずかと歩き出した。慌てて翠がその後を追う。
「なになに？　どしたのグレイ？　その子をどうする気？」
「それはお前だ。こいつの親は子供が出来ると警戒心が強くなる。このままだとえらいことに……」
言いさした声は甲高い絶叫にかき消され、森を揺らした。
翠とグレイが驚いて上を見上げると、小高く聳える木々の間に、子供より数倍大きなモンスターが殺気を放ってこちらを見ていた。黄色い体色が特徴的なそのモンスターは、人間に捕らえられた我が子を見ると、さらに絶叫を続ける。
「や、ヤバげな状況？」
「まあ空気を読むとそうなるな。穏便に済ませたいところだが……」
鞘から剣を抜くと、グレイが翠の前に立ちはだかる。じりじりと距離をとり、なんとか逃げられないものかと模索する。
「グレイ、私この前目くらましの魔術を覚えたんだけど……」
「御免だ。この前って昨日じゃねぇか。そんな不安定なもんで切り抜けられるはずがないだろ」
「でもやってみなくちゃ分からないじゃん」
瞳を輝かせて聞いてくる我が君には逆らえず、グレイは重い肩を上下させた。そしてかすかに頷いたのを見て、翠の目が輝く。
目だけでありがとう、と言うと、左手を前に突き出す。
魔術の神経路が繋がりやすいのは、利き手と逆の手だ。よって翠の場合、右が利き手なので、主に魔術を行使するのは左手である。
突き出しだ左手の先に思念を集中させる。
簡単な魔術程度なら、『語（かたり）』と言う、いわゆる魔術神経路を繋げる儀式のような言葉を口にする必要は無い。
語が必要になってくるのは、大技を放つ時だけだ。
しかし、そんな大技を放つ機会など早々ないので、日常に生活する

分にはあまり係わり合いのないことだ。
だが語を使えば、小さな魔術でも存分にその威力を発揮することができる。
ただし、加減を見極めるのが少々困難なのだが。

「よし！　んじゃ私が考えた語でもいっちょ使ってみるか！」
「げ！　やめろ！　下手して俺の目を潰すなよ」
「いやそれはやってみないと分からん……」
「なに残念そうに言ってんだ。だからお前だけ魔術の授業数減らされたんだろ」
「そーだったっけ？」
へら、と笑って取り合おうとしない翠に見切りをつけ、グレイはじりじりと限界まで間を空ける。
「あ、それはないんじゃないの？　グレイ」
「予防策ぐらい張っておいてもいいだろ。もしものときはお前を置いて逃げる」
「なんでグレイだけ無傷で生還するんだよ……。この場合姫の身の心配をするべきでしょ」
意地汚い従者に『逃げるなよ』と牽制すると、唇を開く。

「＜闇、翳しき光の天蓋にて払われんことを＞」

わずかな語を言い終えると、森の景色は白い閃光に包まれた。
やはり力を入れすぎたらしい。あー、と立ち尽くしていた翠の腰に手が伸び、グレイの肩に担ぎ上げられる。
「ほら、やっぱりな結果じゃねぇか」
「いいじゃん成功したし。あの光はモンスターにはきついと思うよ」
「まあな」
木の葉の絨毯のように枯れ葉で地面が覆われていて、踏むたびに柔らかい感触が靴裏を通して伝わる。

翠は自分の左手を開いたり閉じたりしているが、それを止めてはぁ、と息をついた。
グレイもそれを見ていたが、なにも言わずに、視線をまた目の前に移した。
すこし行くと、だいぶ奥まで来たようで、静寂が辺りを包んだ。
「奥まで来ちゃったね。帰り道分からんけど、どーする？」
「大体の方角くらいは見当をつけてる。向こうの木立を越えたあたりが城の裏手のはず……」
「そうか、じゃあ行こ……ぎゃあああああ！！！」
元気よく一歩を踏み出した翠の足は宙に浮き、その姿は木立の彼方に消えてしまった。
「翠！！！！」
手を付いて翠が消えた辺りに目を配らせてみるものの、どこにもその姿は見えない。
ちょうど翠が立っていたあたりが崖のような急勾配になっていたようで、危険極まりない場所になっていた。
まさか本当に目の前から忽然と姿を消してしまった主を捜そうと、グレイが慌てて腰を上げた。
そのときかすかに、声が聞こえた。
それはまさに小声で、誰にともなく、知れず漏れ出たような呟きだった。

―まぶしい、あおいひかり

子供のような、けれどしっかりとした声音で。
その呟きは、確かに聞こえた。

## 第二話　邂逅

随分と高いところから落ちたものだ。

翠はゆっくり身体を起こすと、遥か高みを見上げた。

節々が痛む。けれどもこの程度の打撲で済んだことに安堵を覚え、そして疑問を持った。

―普通、あそこから落ちたとしたら、骨ぐらい折りそうなもんだけど。

不思議そうに自分の身体をあちこち眺め回すと、まあいいかととりあえずはその疑問を置いておくことにして、周囲を見回した。

と、ふと隣を見やり、翠は大きく目を見開いた。

「オオカミ！？」

地面に尻餅をついている自分の隣に、オオカミというか、犬によく似た動物が居たことに今さらながらに気がついた。

得体の知れないオオカミは丸い双眸を、じっと翠に向けている。

思わず後ずさりしそうになって、はたと気付く。

……このオオカミ、なんか、普通と違う。

それは人が近付いても逃げない、ということではなく、その容貌にあった。

蒼いのだ。まるで、それ自体が燐光を発しているように、ほの蒼く輝いている。
そっと手を伸ばして、やわらかく、それでいて硬く確かな輝く毛並みに触れてみる。

―逃げない。

まず驚いたのは、人が手を触れても動じる様子も見せずに、なにかを待つように翠を見上げているという事だ。
オオカミは丸い双眸を、毛並みの輝きを映したかのような光を放ち、翠に向けている。
まるで、

自分をここで、ずっと

―――待っていたかのような。

不意に、オオカミの口が開いた。そして、大気を震わせる。

―待っていた。あなたを。

オオカミの口は動いてはいるのだが、声は出ていない。まるでこの場所全体がこのオオカミの意思のようにさざめき、オオカミの思念を伝えている。

翠は固唾を呑み、その場で尻餅をついたまま、魅せられたかのごとくその奇異な光景を見つめた。
また、大気が震える。

—今日はこれまで。また次のとき、今度こそ本当にお迎えに上がります。

そう翠に告げると、蒼いオオカミは悠々と立ち上がり、淡く輝く身体を茂みへと滑らせた。
不思議なことに、物音は何もせず、そこに確かにオオカミが居たという確証さえも鈍らせるほど静かな静寂がこの場所を包んでいた。
翠はぼうっとしたまま、先ほどの奇妙すぎる邂逅を反芻していた。

—迎えに来るって。

にわかにはオオカミが迎えに来ると言ったなどとは信じられないだろうが、なぜだか、ほんとうになぜだか。
翠には、信じられるような気がした。
あのオオカミは嘘はつかない。確信とも呼べない不確かな自身が、ほんのりと胸の辺りを包み込んだ。

遠くから、グレイの声が聞こえる。もう安全だ。

安全だと認識しているはずなのに、胸のうちをよぎるもう一つの影を、たしかに感じていた。

—変わる。なにかが。確実に。

鳶色の髪をなびかせ、翠は目を閉じ、胸に手を当てた。

## 第三話　突然

回廊に、靴音が響く。

歩く速度とは対照的に、男の表情は暗い。陰気、という言葉がピッタリ当て嵌まる。

男は今にも歯ぎしりをしそうな表情をしたまま、回廊から見える城の中庭に目を移した。

そこには、光と木漏れ日で彩られた『平和』があった。

王族の子だろうか。小さな手足を懸命に動かし、庭中を走り回っている。

絶え間なく笑い声が響くその光景は、平和という言葉以外では言い表せるものではない。

だがしかし、男はそんな愛らしい光景を見ても、眉一つ動かさず、それどころかますます表情を険しくしていった。

―とにかく、このままいけば、我が国は……。

知らずに噛んでいた指を離すと、男は庭の光景から目を逸らし、回廊を後にした。

＊　＊　＊

それはあまりにも唐突な報せで、翠は即座に反応することが出来ずに、目を見開いたまま、優に数十秒は固まってしまった。

「き、今日中に王位継承の儀式を行うって……！？　い、いくらなんでも唐突すぎない？」

「どうかご容赦下さいませ。これで貴女も晴れて名実ともに正式な王家の一員です。翠さま」

ガウイ老子はうやうやしくお辞儀をすると、長い眉毛の間の優しい瞳を翠に向けた。

対する翠は動揺する心を抑え、徐々に湧き上がる疑念の色を露にした。

「……それは、誰の命でしょう」

「貴女さまの父上……。フォト王でございますよ」

「父が？」

ますます眉間の皺を寄せ、考え込む翠の横に並び立つグレイも顔を曇らせる。

どうもこれは、何かがおかしい。

なぜ父王がこんなに儀式の執行を急ぐのか。

確か、翠が王位継承の儀を行える歳になってもそれに良い顔をしなかったのは、父自身ではなかったか。

一度それを不満に思った翠が王の下へ理由を訊ねに行くと、こう言ったのではなかったか。

『まだお前はその資格がない』

私にはいったい何が足りないのでしょう、と問うた翠に、王は少し

だけ顔を伏せ、こう答えた。

『それはいつか、お前自身が知ることになるだろう。とにかく、今はお前にあれを授けることはできん』

謁見はその一言で終わりを告げた。それ以来一度も翠は同じことを口にしたことも、また不平を言ったこともない。

父も同じだ。あれ以来そのことについては何も言わず、普段の無口な王としてこの国を治め、また寡黙ながらも優しい父としての日々を送っていた。

そんな父が、なぜ？

とにかくここでは埒が明かないと判断すると、翠はガウイ老子に向き直った。

「ガウイ老子。父上はどこに？」

「王に謁見することは許されません」

「どうして！？」

「そのように王自身が申されました」

ガウイ老子の瞳が、さっきまでの優しげな眼差しから、賢者のそれにふさわしいものへと変わる。翠はなにか言いかけようとした口を閉じ、視線を逸らした。

「そう……。分かった」

「では、儀式の時刻は追って報せます」

扉を閉じる音が聞こえ、ローブで床を擦る音も遠くなっていった。

グレイはうつむいたままの翠を見ると、口を開いた。

「どうする気だ？」
「さあ……。どういうことなのかすら分からないからなあ」
薄茶の瞳がグレイを射る。その瞳にいつも通りの破天荒さを感じ取ると、グレイは軽く笑いかけた。翠も笑みを向ける。
「さ、行こう」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7142c/

蒼き鞘

2010年12月28日01時18分発行